

恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションと 大学生の結婚観との関連

今川 真治

(2017年10月4日受理)

The Effect of Communication with Parents on Relationships and Marriage
on the Marital Views of University Students

Shinji Imakawa

Abstract: The purpose of this study is to analyze the effect of communication between university students and their parents concerning relationships and marriage on their future view of marriage. The subjects were 189 university students (82 males and 107 females), and 12 were from single-parent households.

Male students showed stronger traditional marriage views than female students. Both male and female students emphasized that the “personality” of their future mate was important, as was “value alignment” between themselves and that person. Only male students valued the “appearance” of their future partner, while female students valued other features such as their partner’s “jobs”, “educational background”, “economic power”, “having experienced living alone”, “compatibility with her parents”, and “her compatibility with her partner’s family”. There is a qualitative difference between male and female students in communication with the opposite-sex parent and a quantitative difference in communication with the same-sex parent. Male students equate themselves with their fathers, and the marriage view of the fathers had an effect on students’ views of marriage. Regarding the relationship between the university students and their parents on their view of marriage, male students’ marriage perspectives are directly influenced by communication with both their fathers and mothers, while female students’ views of marriage are not only affected by the communication itself but by the relationship between the parents.

Key words: university students, communication with parents, marriage view

キーワード：大学生，親とのコミュニケーション，結婚観

1. はじめに

青年期に人は、児童期的アイデンティティをこわし、大人としてのアイデンティティの基礎形成に努力することで、忠誠を身につけ、自分というものを確かなものにつくり上げていけるようになる（水口，1989）。さらに、アイデンティティの形成と同時に、二次性徴の発動などを背景として、ジェンダー・アイデンティティ（性同一性）が再構築される。

アイデンティティやジェンダー・アイデンティティ

の形成と同時期に、青年は、親からの独立を模索する。それは、「心理的離乳」の言葉に代表されるように、乳児期から児童期までの親への完全な依存から、精神的に脱却することを意味する。青年の性役割形成において、同性の親は自己の同一視の対象となるが、異性の親は理想の異性像のモデルとして同一視され、同時に、承認できぬ特性や生き方は積極的に排除されて、逆方向の行動をとろうとする（西平，1990）。

岡本・上地（1999）は、青年期の友人関係について、青年期前期には、同性の友人との間に友情が芽生え、

中期になると、同性友人との親密さがさらに深まると述べたが、友人関係と同様に、異性関係も青年の関心事となる。伊福・徳田（2008）は、青年期は異性を意識し始め、相手を理想化し片思いを中心とする恋愛から、互いに独立した存在であることを認め合い、実際に異性と交際し、親密な関係を作っていく時期であると述べている。このように、人は青年期に、アイデンティティの確立、親からの心理的独立、友人や異性との親密な関係の構築などを経験していく。

青年期は同時に、自分自身の将来の見通しを立てていく時期でもある。将来の見通しを立てる中で、「結婚」に関わるライフイベントについても考えを巡らせはじめる。例えば、将来自分が結婚したいか否かはもちろん、どのような相手と結婚したいか、結婚後はどのような生活を送りたいか、子どもは欲しいか、どのような家庭を築きたいか、配偶者と同棲する場合は家事の分担をどのようにするかなど、さまざまである。現在の青年は、結婚は個人のライフスタイルの一つの形であるという認識が広まりつつある社会で育ち、また、男女共修の家庭科教育で、「結婚」や「出産」、「子育て」、「家族」に関することを学んできた世代でもある。そのため、世間一般的な結婚についての考え方の変化と同様に、青年の結婚についての考え方も変化してきているのではないかと考えられる。

将来の結婚について考える際、青年にとって、最も身近な異性関係のモデルとして考えられるのは、定位家族の存在である。とりわけ現在は、少子化にともなってきょうだい数が減少し、ひとりっ子の人も珍しくないことから、定位家族の中でも特に親を参考にして結婚について考える場合が多いと考えられる。石野・清水（2010）が大学生を対象に行った研究でも、結婚について参考に行っていることとして、男女とも「きょうだい」や「過去の家族の記憶」よりも、「過去の親の記憶」という回答が多数であった。

結婚について親を参考に考える際、青年は親のどのような面を参考にするのだろうか。綿引・横道（1998）は、母親の就労形態が、無職、パートタイム就労、フルタイム就労の順に、子ども（大学生）が性役割にとらわれない、より柔軟な結婚観を持っていることを明らかにした。また、父親や母親を親として見習いたくない人の方が、見習いたい人よりも柔軟な結婚観や性役割分業観をもっていることも明らかとなった。両親を自分や結婚相手の理想のモデルとして捉えるのではなく、古い性別役割観を持っている親を否定的に捉えることによって、結婚通念や性別役割分業観にとらわれない柔軟な考え方ができるのではないかと述べている。また、斎藤（2012）は、親がそろって2人で外出

しないことや親同士がけんかをするのが、子ども（大学生）の結婚への希望を妨げている可能性を示唆した。

さらに、親の姿や親同士の関係性だけでなく、親と青年とのコミュニケーションの様態も、青年の結婚観を形作っている。綿引・横道（1998）は、男女の育てられ方の違い、母親の接触態度や会話といった母子関係などの家族関係が、大学生の結婚観に影響を与えていることを明らかにした。例えば、母親との会話の程度では、お互い自然に話をしている人の方が、あまり話さない人よりも、「結婚が当然」というような従来の考え方にとらわれない、柔軟な結婚観や性別役割分業観をもっており、特に男子にこの傾向がみられた。また、岩月（2003）は、女性が恋愛や結婚をする時に基準となるのが「理想の男性像」であり、その中には父親が入っていると述べている。つまり、女性が父親とのコミュニケーションの中で、父親を理想の男性と化し、それが女性自身の恋愛や結婚についての考えにも影響を及ぼすとと言える。

このように、親の姿や親同士の関係に加えて、親との「コミュニケーション」も、青年の結婚観の形成に影響を与えるとと言える。しかし、親とのコミュニケーションの量だけでなく、その内容に注目して、青年の結婚観との関連について検討した研究はみられない。

本研究では、青年期後期にあたる大学生の親とのコミュニケーションに着目し、とりわけ、恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションと、大学生の結婚観との関連について検討することを目的とする。恋愛や結婚についてのコミュニケーションの内容として、青年と親との恋愛や結婚についての会話や、青年の交際経験に関する親との会話や行動、また、親同士の関係について取り上げる。

2. 方法

2-1 調査対象と調査時期

広島大学に在籍する学部1～4年の男女を対象とし、平成28年7月から10月の間に質問紙の配付と回収を行った。

2-2 調査項目

(1) 基本的属性

学年、性別、家族構成、居住形態（自宅か下宿か）、異性との交際の有無等について尋ねた。

(2) 結婚観に関する意識と関連要因

①結婚観尺度（小田切，2003）

小田切（2003）が作成した結婚観尺度を使用し、対象者の結婚に対する考えや結婚願望の強さ、結婚する理由などを調査した。この尺度は、「結婚への期待」、「結

婚生活に対する拘束感」,「伝統的結婚観」の3因子からなる。

②結婚相手に求める条件

第14回出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所, 2010)及び未婚女性1000人に聞いた結婚観(MACROMILLリサーチデータ, 2006)を参考に,結婚相手に求める条件を16項目作成した。各項目に対し,「全く重視しない」から「非常に重視する」の4件法で回答を求めた。

(3) 恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーション

①両親の結婚情報に関する知識

両親の出会いのきっかけ,結婚年齢,結婚の決め手について,両親それぞれから,「聞いたことがある」,「聞いたことがあるが忘れた」,「聞いたことがない」から選択式で回答を求めた。プロポーズに関する話と結納に関する話について,「ある」,「ない」のいずれかを選択するように求めた。結婚式を挙げた両親を持つ回答者については,結婚式の写真を見たことがあるか,また,結婚式に関するエピソードを聞いたことがあるかについて尋ねた。

②父親(母親)とのコミュニケーション

恋愛や結婚に関する父親(母親)とのコミュニケーションについて尋ねた。親との会話内容について,「父親(母親)に,あなたの好きな異性のタイプについてどのくらい話しますか。」をはじめ7項目の質問に,「よく話す」から「全く話さない」の4件法で回答を求めた。また,大学生がこれまでに交際した異性について,交際経験人数と父親(母親)に会ったことがある人数をそれぞれ記述し,交際相手について父親(母親)に話したことのある項目を選択するように求めた。現在父親(母親)がいない場合は,回答不要とした。

3. 結果および考察

広島大学に在籍する学部1~4年の男女240名に質問紙を配布し,189票を回収した(回収率78.7%)。

3-1 回答者のプロフィール

回答者の性別および学年ごとの人数を表1に示す。回答者189名の性別は,男子が82名,女子が107名であった。男女のそれぞれにおいて,両親のいる家庭と片親の家庭の状況を表2に示す。また,学生の居住形態を自宅と下宿に分けて表3に示す。回答者の約17%が自宅生であったが,この割合は,広島大学全体の自宅率(約3割)よりも低かった。

3-2 大学生の結婚観

(1) 結婚観尺度の分析

結婚観尺度(小田切, 2003)を用いて算出した,「結

表1 回答者の性別および学年

性別	学年				合計
	1年	2年	3年	4年	
男子	23	15	21	23	82
女子	26	29	27	25	107
合計	49	44	48	48	189

表2 回答者の性別および両親の有無

性別(合計人数)	両親のいる家庭	ひとり親の家庭	
		父子家庭	母子家庭
男子(82)	75	0	7
女子(107)	102	2	3
合計	177	2	10

表3 回答者の性別および居住形態

性別	居住形態		合計
	自宅	下宿	
男子	10	72	82
女子	23	84	107
合計	33	156	189

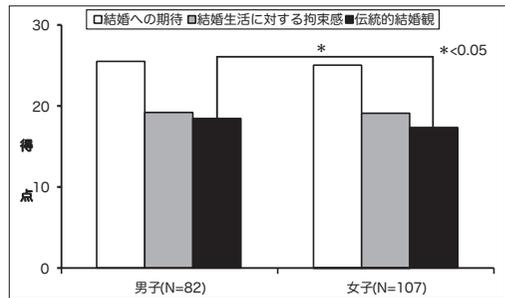


図1 回答者の性別と結婚観尺度得点

婚への期待」,「結婚生活に対する拘束感」,「伝統的結婚観」の3因子の性別の平均値を図1に示す。

男女の「伝統的結婚観」に有意差($t=2.74, p<0.05$)がみられ,男子の方がより強い伝統的結婚観を持っていることが明らかとなった。他方,「結婚への期待」および「結婚生活に対する拘束感」について,男女差はみられなかった。また,学年別,親の有無別に比較したところ,いずれも有意な差はみられなかった。

(2) 結婚相手に求める条件

結婚相手に求める条件16項目について,「全く重視しない」を1点,「どちらかといえば重視しない」を2点,「どちらかといえば重視する」を3点,「非常に重視する」を4点としたときの各項目の男女別の平均得点を表4に示す。

平均得点から,男女ともに,「性格・人柄」や「価値観が合うか」を特に重視していた。また,男子が女子よりも得点が高かったのは「容姿」のみであった一方,女子は男子よりも「職業」,「学歴」,「経済力」,「教養があるか」,「親元を離れて暮らした経験があるか」,

表4 回答者の性別と結婚相手に求める条件

項目	男子の 平均得点 (SD)	女子の 平均得点 (SD)	t 値
1 年齢	2.94 (0.70)	2.84 (0.53)	1.04
2 容姿	2.91 (0.63)	2.69 (0.60)	2.46 *
3 職業	2.60 (0.71)	2.99 (0.46)	-4.31 **
4 学歴	2.23 (0.74)	2.50 (0.62)	-2.60 **
5 経済力	2.51 (0.72)	3.25 (0.49)	-7.93 ***
6 健康	3.29 (0.59)	3.40 (0.62)	-1.21
7 性格、人柄	3.87 (0.34)	3.93 (0.26)	-1.34
8 価値観が合うか	3.70 (0.53)	3.78 (0.44)	-1.10
9 教養があるか	3.18 (0.75)	3.43 (0.53)	-2.52 *
10 家事の能力があるか	2.94 (0.82)	2.75 (0.66)	1.72
11 恋愛感情が持てるか	3.57 (0.54)	3.50 (0.59)	0.93
12 共通の趣味があるか	2.62 (0.89)	2.64 (0.78)	-0.19
13 親元を離れて 暮らした経験があるか	1.73 (0.81)	2.07 (0.74)	-2.93 **
14 自分の親との相性	2.39 (0.89)	2.75 (0.68)	-2.99 **
15 相手の家族と 自分との相性	2.55 (0.83)	3.00 (0.67)	-4.00 ***
16 子どもが好きか	2.90 (0.91)	3.15 (0.73)	-2.00 *

*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

「自分の親との相性」、「相手の家族と自分との相性」、「子どもが好きか」などの多くの項目を重視していた。女子が「自分の親との相性」や「相手の家族と自分との相性」を結婚相手に求めることは、未婚女性が結婚に抱くイメージ（内閣府，2014b）として最も多かった回答が、「相手の家族との付き合いがめんどう」であったことの裏がえしであろう。この結果は、結婚に対する考え方が多様化している昨今においても、女性が男性の家に嫁ぐという意識が未だに根強く残っている可能性を示唆する。

両親のいる家庭とひとり親家庭別に比較した、結婚相手に求める条件の平均得点について、両親の有無に関して平均得点に差がみられた項目を表5に示す。

表5 両親の有無と結婚観尺度得点

項目	男子	
	両親のいる 家庭(N=75)	ひとり親 家庭(N=7)
6 健康	3.33	2.86
14 自分の親との相性	2.45	1.71
項目	女子	
	両親のいる 家庭(N=102)	ひとり親 家庭(N=5)
5 経済力	3.23	3.80

*:p<0.05

男子では、両親のいる家庭とひとり親家庭で、「健康」($t=2.05, p<0.05$)と「自分の親との相性」($t=2.12, p<0.05$)に有意な差がみられ、いずれもひとり親家庭の男子の方が得点が低かった。特にひとり親家庭の

男子が「自分の親との相性」を求めないのは、興味深い結果であった。また、女子においては、「経済力」($t=-2.59, p<0.05$)について、ひとり親家庭の女子の方が得点が高かった。ひとり親家庭の女子は、親の家庭経営の困難さを知っているために、結婚相手に対してより強く経済力を求めるのではないかと推測される。

結婚相手に求める条件の平均得点について、居住形態で平均得点に差がみられた項目を表6に示す。

表6 居住形態と結婚観尺度得点

項目	男子	
	実家生 (N=34)	下宿生 (N=21)
14 自分の親との相性	3.00	2.57
15 相手の家族と 自分との相性	3.55	3.00

** :p<0.01

男子について、自宅生と下宿生の間に「自分の親との相性」($t=3.03, p<0.01$)と「相手の家族と自分との相性」($t=2.85, p<0.01$)で有意な差がみられ、いずれも自宅生の得点の方が高かった。自宅生は、家族と直接コミュニケーションをとる機会が多いと考えられることから、親を含めた家族について日常的に意識し、結婚相手に対しても、相手の家族と自分の家族の相性の良さを求めているのではないかと推測される。他方、女子では、居住形態別で有意な差はみられなかった。

(3) 大学生と親とのコミュニケーション

両親がいる大学生男女177名を対象に分析を行った。

①親の恋愛や結婚に関するコミュニケーション

親の恋愛の話を、父親から聞く頻度について図2に、母親から聞く頻度について図3に示す。

父親から「よく聞く」と回答した人は男女ともおらず、「時々聞く」、「たまに聞く」と回答した人は男女とも1割以下だった。一方、母親から「よく聞く」と回答した人は女子に数名おり、「時々聞く」、「たまに聞く」と回答した人は男女ともに父親のそれよりも多かった。このことから、親の恋愛について聞く頻度は、女子が母親から聞く頻度が最も高く、男子が父親から聞く頻度が最も低いと言える。

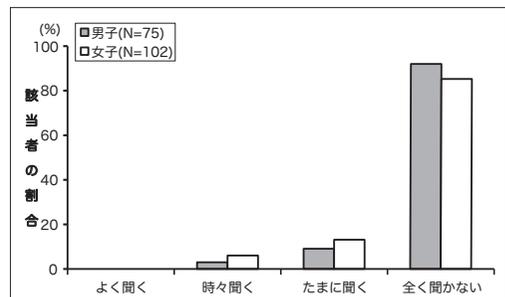


図2 父親から恋愛の話を聞く頻度

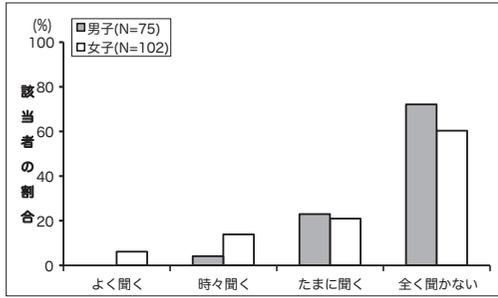


図3 母親から恋愛の話を書く頻度

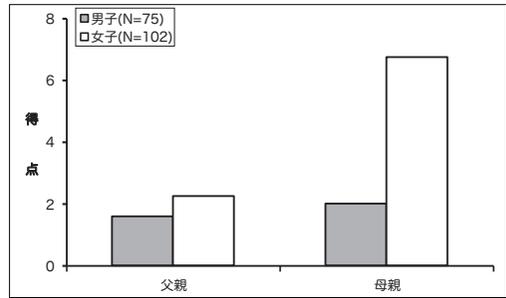


図5 大学生の恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーション得点

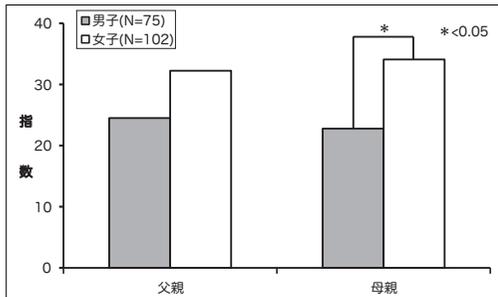


図4 回答者の性別と親の結婚情報認知指数

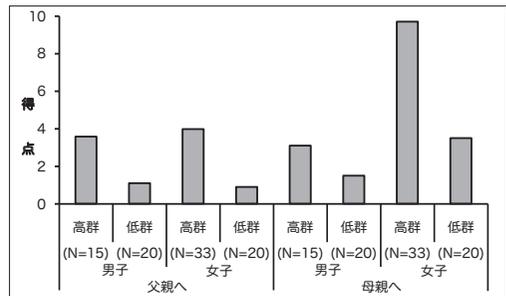


図6 父親の結婚情報認知指数とコミュニケーション

親の結婚に関する情報をどのくらい認知しているかに関して、「親の結婚年齢を聞いたことがあるか」、「親の結婚の決め手を聞いたことがあるか」、「プロポーズに関するエピソードを聞いたことがあるか」、「結納に関するエピソードを聞いたことがあるか」の4項目の質問について、聞いたことがある場合は1点、ない場合は0点として、合計得点を10倍したものを「親の結婚情報認知指数」とし、男女別平均値を図4に示す。

「母親」の結婚情報認知指数の平均値に、男女で有意な差がみられ ($t=3.00, p<0.05$)、親の結婚に関する情報について、女子は男子よりもより多く認知しており、その情報を母親から入手していることが分かった。

②大学生自身の恋愛や結婚に関するコミュニケーション

大学生自身の恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーション得点の平均を図5に示す。これは、大学生自身が親に対して、「好きな異性のタイプ」、「恋愛に関する悩み」、「結婚願望の有無」、「理想の結婚年齢」、「理想の結婚相手」、「理想の結婚式」、「将来子どもを持つことへの希望」の7項目をそれぞれどのくらい話すかを得点化し、平均を算出したものである。

図から、男子では、父母とコミュニケーション得点に差がみられなかったのに対し、女子は、父親よりも母親に対してよく話していることが分かった。

父親の結婚情報認知指数 (0~100) が50以上の人

を高群、0の人を低群とし、群別に大学生主体の恋愛や結婚に関するコミュニケーション得点の平均を比較した結果を図6に示す。

男女ともに、低群よりも高群の方が、大学生主体のコミュニケーション得点が高いことが分かった。特に、女子の高群は、母親とのコミュニケーション得点が最も高かった。また、母親の結婚情報認知指数についても、同様の結果が得られた。

これらの結果から、親が自身の結婚について話してくれる関係にある子ども (大学生) は、自分自身の恋愛や結婚に関する話も親にし、親からもそのような話を聞くことがあると言える。特に女子は、同性である母親との心理的距離が近い (藤田・岡本, 2009) ため、親の結婚や自身の恋愛や結婚というプライベートな話題に関しても、母親とコミュニケーションをとることが多いのだと考えられる。

③親同士の相互評価

親同士の相互評価をそれぞれから聞く頻度 (パートナーの良いところを言っているのをどのくらい聞くか、欠点を言っているのをどのくらい聞くか) を尋ねた。父親による母親の評価の結果を図7に、母親による父親の評価の結果を図8にそれぞれ示す。

父親による母親の評価について、男女ともに、「良いところも欠点も言っているのを聞く」人の割合が最

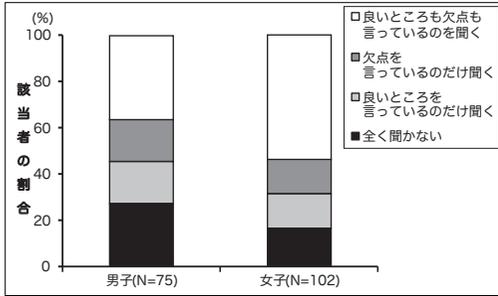


図7 父親の母親に対する評価を聞いた学生の割合

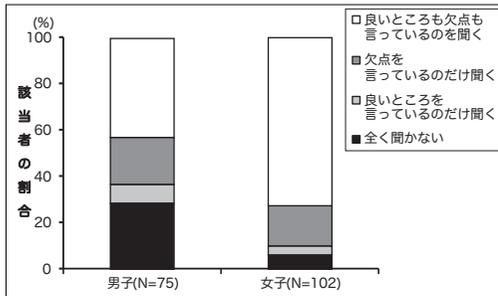


図8 母親の父親に対する評価を聞いた学生の割合

も高かった。また、男女ともに、「良いところを言っているのだけ聞く」人の割合と、「欠点を言っているのだけ聞く」人の割合は、同程度であった。

母親による父親の評価についても、男女ともに、「良いところも欠点も言っているのを聞く」人の割合が最も高かった。また、男女ともに、「良いところを言っているのだけ聞く」人の割合よりも、「欠点を言っているのだけ聞く」人の割合の方が高かった。つまり、母親が父親の良いところのみを言うことは少ないことが推測される。また男子では、父親から「全く聞かない」人と母親から「全く聞かない」人の割合が同程度であったのに対し、女子は、父親から「全く聞かない」人よりも母親から「全く聞かない」人の割合が低かった。これは、親が女子の前でパートナーの評価を言う頻度が高いと言うより、親の相互評価について、男子よりも女子の方が関心をもって聞いているためではないかとも考えられる。女子は、母親が父親から愛されているか、また、母親は父親との関係に満足しているかどうかをよく観察しており(岩月, 2003)、それが自分の恋人や結婚相手を選択する際の判断材料となるからではないかと考えられる。

(4) 親とのコミュニケーションと結婚観との関連

① 親の恋愛や結婚について聞いた経験と大学生の結婚観

大学生が、親の恋愛の話をもとに聞いた経験別に、結婚観得点の平均を比較した結果を図9に示す。

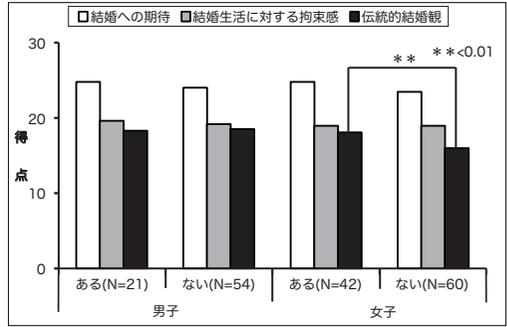


図9 母親の恋愛について聞いた経験と結婚観

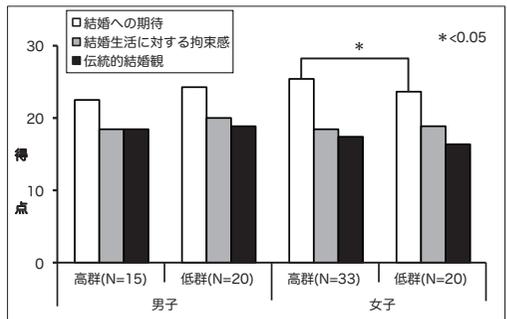


図10 父親の結婚情報認知指数と学生の結婚観

母親から聞いた経験の有無では、女子の伝統的結婚観において、聞いた経験がある女子は、ない女子に比べ伝統的結婚観得点が高かった ($t=2.66, p<0.01$)。これは、女子が、同性の親である母親の過去の恋愛の話を書く中で、女性にとっての恋愛や結婚について考えを深め、それが性別役割分業などを含む伝統的結婚観を強める要因になったのではないと思われる。一方、父親から聞いた経験については、男女ともいずれの因子にも有意な差はみられなかった。

父親の結婚情報認知指数(0~100)が50以上を高群、0の人を低群とし、群別に結婚観得点の平均を比較した結果を図10に示す。

女子の結婚への期待得点において、高群の女子は低群の女子に比べ、結婚への期待得点が高かった ($t=2.30, p<0.05$)。岩月(2003)は、娘は、父親が母親を愛しているかどうか、また、父母の間に愛と信頼の関係があるかどうかを見ていることを述べている。父親から母親との結婚の話を書く経験は、女子において、父母の間に愛と信頼の関係があるかについて判断する重要なコミュニケーションであると考えられる。父親の結婚情報認知指数が高い、つまり、父親から母親との結婚の話を書いた経験がある女子は、父親とのコミュニケーションの中で、父親から母親への愛

や信頼を感じ取り、それによって自身の結婚への期待がより強まっているのではないと思われる。一方、母親の結婚情報認知指数については、男女ともに有意な差はみられなかった。

②大学生自身の恋愛や結婚に関するコミュニケーションと結婚観

大学生自身の恋愛や結婚に関する父親とのコミュニケーション得点（0点～21点）が7点以上である人を高群、0点である人を低群とし、群別にそれぞれの結婚観得点の平均を比較した結果を図11に示す。

男子の伝統的結婚観得点について、高群の方が低群よりも伝統的結婚観得点が高かった ($t=4.06, p<0.001$)。男子は、自分自身の恋愛や結婚に関して父親とコミュニケーションをとる中で、父親の考えにも触れていると推測される。自分自身の恋愛や結婚に関するコミュニケーションを父親とよくとる男子は、同性の親である父親が持つ、性別役割意識などを含む伝統的結婚観に触れ、父親の考えを取り入れる機会が多いのではないかと考えられる。また、女子では、群間に有意な差はみられなかった。

大学生主体の恋愛や結婚に関する母親とのコミュニケーションについて、結婚観得点の平均を比較した結果を図12に示す。

高群の女子の結婚への期待得点は、低群の女子よりも高かった ($t=3.08, p<0.01$)。女子は、自分自身の恋愛や結婚に関する母親とコミュニケーションの中で、母親が自分の話を聞いてくれるという安心感から、結婚への肯定的なイメージを形作っているのではないと思われる。母親の受容的な態度は、母子相互の親和的な関係を形成し、そのことが社会志向性を高める（小高，2015）こととも関連していると考えられる。他方、男子では、群間に有意な差はみられなかった。

③親同士の相互評価と結婚観

父親による母親の評価を聞いた経験の有無と評価の内容別に結婚観得点を比較した結果を図13に示す。

父親による母親の評価を聞いた経験の有無と評価の内容別では、男子の結婚観得点に有意な差はみられなかった。一方、女子の伝統的結婚観得点において、父親が母親の「良いところを言っているのだけ聞いたことがある」人は、「良いところも欠点も言っているのを聞いたことがある」人よりも伝統的結婚観得点が低かった ($t=-2.51, p<0.05$)。また、同じく父親が母親の「良いところを言っているのだけ聞いたことがある」人は、評価を言うのを聞いたことが「ない」人よりも、伝統的結婚観得点が低かった ($t=-2.55, p<0.05$)。つまり、父親が母親の「良いところを言っているのだけ聞いたことがある」女子は、伝統的結婚観が弱いといえる。また、結婚への期待得点において、父親が母親の「欠点を言っているのだけ聞いたことがある」女子は、「欠点を言っているのだけ聞いたことがある」男子よりも結婚結婚への期待得点が低く ($t=2.29, p<0.05$)、結婚への期待が小さいことが分かった。

母親による父親の評価についての結果を図14に示す。母親による父親の評価を聞いた経験の有無と評価の内容別では、男子は結婚観得点に有意な差はみられなかった。一方女子の結婚への期待得点をみると、母親が父親の「欠点を言っているのだけ聞いたことがある」

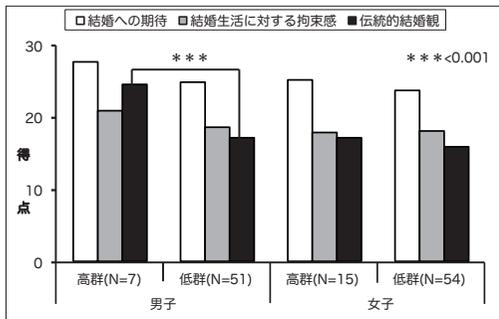


図11 父親とのコミュニケーション得点と結婚観

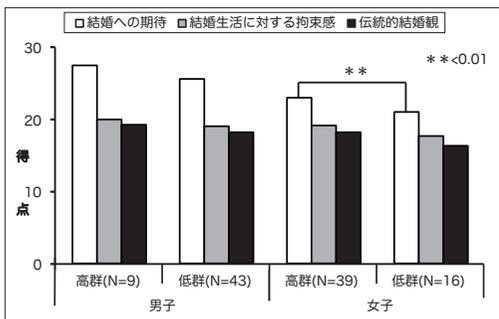


図12 母親とのコミュニケーション得点と結婚観

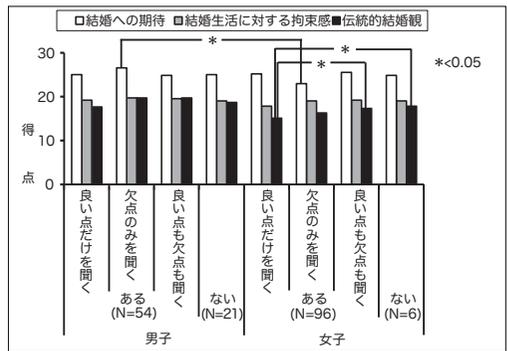


図13 父親の母親に対する評価を聞いた経験と結婚観

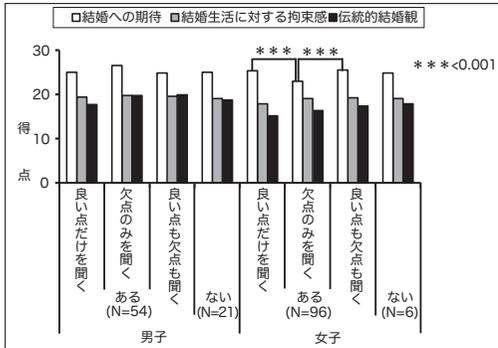


図14 母親の父親に対する評価を聞いた経験と結婚観

人は、「良いところを言っているのだけ聞いたことがある」人よりも低く ($t=3.95, p<0.001$), 「良いところも欠点を言っているのを聞いたことがある」人よりも低かった ($t=-3.69, p<0.001$)。言い換えると、母親が父親の「欠点」を言っているのだけを知る経験は、女子の結婚への期待を小さくさせると言える。

父親が母親の「欠点」を言っているのだけを知る経験、および、母親が父親の「欠点」を言っているのだけを知る経験は、どちらも女子の結婚への期待を阻害していると考えられる。女子は男子よりも母親を理想化し理解している(岡本・上地, 1999)ことや、女子は両親の夫婦仲が良いかどうかを見ている(岩月, 2003)ことなどに関連し、父母がパートナーの欠点を言っているのしか聞かない、つまり、父母同士の関係が良好とは言えない家庭の女子は、結婚に対して肯定的な印象を持っていないものと思われる。

4. まとめ

4-1 大学生の結婚観

多くの先行研究と同様に、男子学生の伝統的結婚観は、女子学生のそれよりも強いことが明らかとなった。結婚・家族形成意識調査(内閣府, 2014b)によると、未婚女性よりも未婚男性の方が、結婚は「した方が良い」と考えている人の割合が高かった。また、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分業意識に対して、2012年の調査と2014年の調査(内閣府, 2012: 2014a)を比較すると、時代の流れとともに「賛成」の人の割合が低下し、「反対」の人の割合が上昇してきてはいるものの、性別にみると、「反対」の人の割合は女性の方が高かった。本研究でもこの傾向が確認されたことは、社会全体としては伝統的結婚観が薄れてきている中で、未だに性差が顕著であり、男性の国民皆婚の意識や性別役割分業意識が根強

いことを示している。

本研究の結果から、大学生が将来の結婚相手に求める条件として、男女とも「性格・人柄」を最も重視しており、次いで、男性は「容姿」を、女性は「経済力」および「親族同士の付き合い」を重視していることが分かった。これは、人間が「有性生殖」をする動物であり、「性淘汰」が存在する(森川, 2007)ことが根底にあると考えられる。男性は、体格・体力に優れ、経済的資源を持ち、その資源を長期的に安定供給し、魅力的な顔や体型を持つ人が好まれ、女性は、厳しい自然環境に適応できるほど「健康」で、子どもをたくさん産み、上手に育てる人が好まれる(森川, 2007)ように進化してきたのであり、男性、女性が結婚相手に求める資質や能力は、時代によって大きく揺らぐことはないということなのであろう。

4-2 大学生と親とのコミュニケーション

本研究では、大学生の異性の親とのコミュニケーションには男女に質的な差があり、同性の親とのコミュニケーションには量的な差があることが示唆された。

男子は、異性の親である母親とコミュニケーションをとる中で、母親を理想の女性像として自分の中に取り込んでいることが示唆された。また男子は、父親とのコミュニケーションが希薄である傾向がみられた。

一方女子は、異性の親である父親とはある程度コミュニケーションをとっていたが、それには男子のように単に異性の親を理想の異性像とするだけではなく、父親が、女子にとって同一視の対象である母親を愛しているかをよく見ている(岩月, 2003)ことに関連していると思われる。つまり、女子にとって父親は、母親という媒介をとおした間接的存在である(小野寺, 1984)と言える。

また、女子と母親とのコミュニケーションは、他の組み合わせよりも最も親密であることが明らかとなり、小高(2015)などのさまざまな先行研究を支持する結果であった。男子よりも女子の方が親への無意識の同一視をしている(若原, 2003)ことに加えて、母親が女子に「精神的な役割」を期待している(高木・柏木, 2000)ために、母と女子が互いにコミュニケーションをよくとり、情緒的な絆が強く親密になる(小高, 2015)のだと考えられる。

本研究において、大学生自身の異性との交際経験と、恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションとの間には関連があり、大学生が異性との交際を経験することは、大学生と親が恋愛や結婚について話す一つのきっかけとなっていることが示された。

4-3 親とのコミュニケーションと大学生の結婚観

本研究において、父親とよく恋愛や結婚に関するコ

コミュニケーションを行う男子は、結婚に対して伝統的な考えが根強いことが分かった。現在の大学生の父親が学校教育を受けていた頃は、家庭科教育が男女別修であったためか、男性は女性よりも、また、年齢が高いほど、性別役割分業意識が強く残っている。このことから、父親とのコミュニケーション頻度が高いほど、男子が、同性の親である父親をモデリングする機会が多い可能性が示唆された。また、父親とよくコミュニケーションを行う男子は、「自分の親との相性」を結婚相手に強く求めていたことなどから、親と安定的な関係となってもなお、父親を同一視しており、父親の結婚への考えが、男子の結婚観に影響を与えていることが示唆された。

男子は、異性の親である母親とのコミュニケーションの中で、理想の女性像を作り上げたり、異性との関わり方を学んだりする。本研究において、異性との関わり方に関して、母親とよくコミュニケーションを行う男子は、「自分と親との関係」が良い相手や、自分と「価値観が合う」相手と結婚したいと考えるなど、「他者との関係」をより強く意識していることが示唆された。伊藤（1999）は、母親世代、すなわち成人期の女性の発達には、現実生活では他者（おもに家族）のために生きるというあり方から、徐々に「自分も」大切にしたい生き方へと移行していく一方で、まわりの人々の世話やより広い社会との関係に、生きがいや自分らしさを見つけていくという面も持っている述べている。このことから、他者も自分も大切にしたいと考えている母親の影響を受け、男子は、自らの結婚の考え方に、他者との関わり的重要性を取り入れているのかもしれない。

父親とのコミュニケーションが女子の結婚観に与える機序として、父親から情緒的支持を受けている母親を持つ女子ほど、父親に魅力を感じる（小野寺、1984）ことに加え、そのことが女子の結婚への期待を高めていることが明らかとなった。また、父親とコミュニケーションをよく行う女子は、男性が結婚相手に求める傾向にある「容姿」の端麗さを結婚相手に強く求めており、これは、父親とのコミュニケーションに直接的に影響を受けたものと考えられる。このように、女子と父親とのコミュニケーションは、女子の結婚観に、母親を媒介として影響を与える場合と、直接的に影響する場合があると言える。

一方、母親とのコミュニケーションが親密である女子ほど、結婚への期待が高いことが明らかとなった。しかし、母親が父親の欠点ばかり言う家庭で育った女子は、結婚への期待が低いことも明らかとなった。つまり、女子の結婚観は、母親とのコミュニケーション

の頻度だけでなく、母親と父親との関係性からも影響を受けると言える。

以上のように、親とのコミュニケーションと大学生の結婚観との関連について、男子の結婚観は、男子と父母それぞれとのコミュニケーションから直接的な影響を受けているのに対し、女子の結婚観は、直接的な影響に加え、親同士の関係性からも影響を受けていることが明らかとなった。

本論文は、平成28年度広島大学教育学部卒業生湯池華子の卒業研究の収集データをもとに作成したものである。

【引用文献】

- 藤田ミナ・岡本祐子．(2009). 青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連．広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，8, 121-132.
- 伊福麻希・徳田智代．(2008). 青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討．久留米大学心理学紀要，7, 61-68.
- 石野陽子・清水寛之．(2010). 青年期の結婚観と子育て観に関する予備的研究．島根大学教育学部紀要，43, 87-95.
- 伊藤美奈子．(1999). 個人と社会という観点からみた成人期女性の発達．岡本祐子（編）. 女性の生涯発達とアイデンティティ－個としての発達・かかわりの中での成熟－ (pp.87-112). 京都：北大路書房．
- 岩月謙司．(2003). 娘は男親のどこを見ているか．東京：講談社．
- 株式会社マクロミル．(2006). 未婚女性1000人に聞いた結婚観．
- 国立社会保障・人口問題研究所．(2010). 第14回出生動向基本調査．
- 小高恵．(2015). 大学生の心理社会適応に与える母子関係の影響について．太成学院大学紀要，17, 39-50.
- 水口禮治．(1989). 青年期までの発達過程．水口禮治・竹内照宗（編）. 青年期までの発達心理学 (pp.21-37). 東京：ブレーン出版．
- 森川友義．(2007). なぜ、その人に惹かれてしまうのか？ ヒトとしての恋愛学入門．東京：ディスカヴァー・トゥエンティワン．
- 内閣府．(2012). 女性の活躍推進に関する世論調査．
- 内閣府．(2014a). 女性の活躍推進に関する世論調査．
- 内閣府．(2014b). 結婚・家族形成に関する意識調査．
- 西平直喜．(1990). 成人になること－生育史心理学から．東京：東京大学出版会．

- 小田切紀子. (2003). 離婚に対する否定的意識の形成過程：大学生を対象として. *発達心理学研究*, 14, 3, 245-256.
- 岡本清孝・上地安昭. (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係. *教育心理学研究*, 47, 248-258.
- 小野寺敦子. (1984). 娘からみた父親の魅力. *心理学研究*, 55, 289-295.
- 斎藤嘉孝. (2012). 定住家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与える影響～大学生を対象とした量的調査の結果より. *法政大学キャリアデザイン学部紀要*, 9, 369-379.
- 高木紀子・柏木恵子. (2000). 母親と娘の関係 —夫との関係を中心に—. *発達研究*, 15, 79-94.
- 若原まどか. (2003). 青年が認識する親への愛情や尊敬と, 同一視および充実感との関連. *発達心理学研究*, 14, 39-50.
- 綿引伴子・横道綾乃. (1998). 大学生の家族観. *金沢大学教育学部紀要：教育科学編*, 47, 255-262.